

## 【目的】

看護師養成機関教員の勤務様態と業務および職務に対する意識の実態を明らかにし、質の高い看護教育の実現に向けた教員配置の適正化について考察するための基礎資料とする。

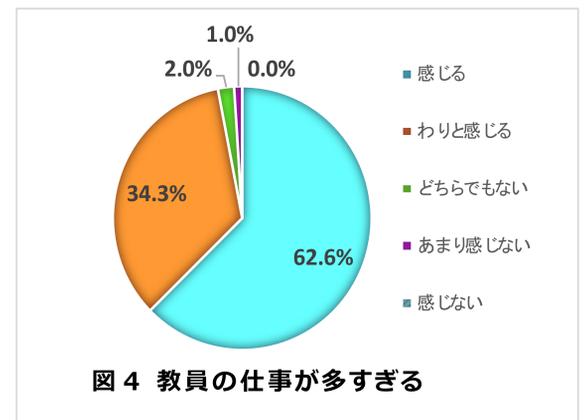
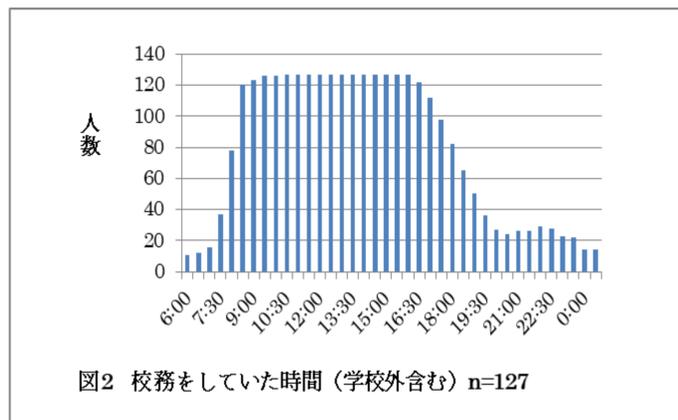
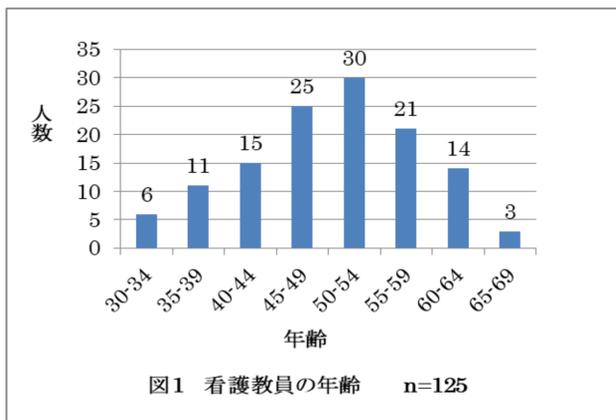
## 【研究方法】

対象：県内の看護師養成機関教員（新入教員，中途採用教員を除く）（以下看護教員とする）全員とした。  
調査期間：平成28年10月1日～12月31日  
調査方法：研究の説明文と共に自記式質問紙および調査票を配布し，回収は郵送とした。調査票は，平成18年に文部科学省が行った小・中・高校教員の勤務実態調査を基に看護教員向けに改訂したものをを用いた。  
調査内容：自記式質問紙は，個人のプロフィールと仕事のやりがいや生活のゆとり，講義の準備時間，自己研鑽時間等に対する意識についてである。また調査票は，1日の時間経過を追った業務記録について調査期間中任意の2日間の記録を提出してもらった。  
分析方法：調査対象は記述統計を行い，勤務様態は平均値を求めた。仕事に対する意識は教育経験年数でKruskal-Wallisの順位和検定で関連をみた。教育経験年数は神奈川県看護師等養成機関連絡協議会の看護教員のキャリア発達ステージⅠ期1～3年，Ⅱ期4～9年，Ⅲ期10～14年，Ⅳ期15年以上で分類した。  
尚，調査はA倫理審査委員会の審査を経て実施した。

## 【結果】

### 1. 対象者の概要

調査紙の配布数は383，回収数127（回収率33.2%）であった。性別は女性が96.8%を占め，平均年齢49.7歳（最大68，最小30）であった。年齢分布は40代後半から50代前半が多くを占めていた（図1）。また，教育経験は平均11.3年（最大29.6，最小1.4，SD7.7）で現職の在職期間の平均は6.8年であった。

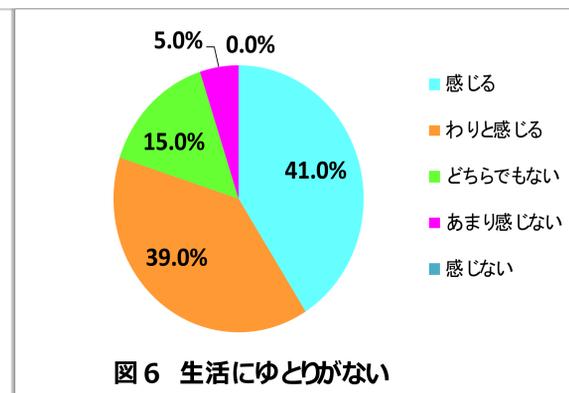
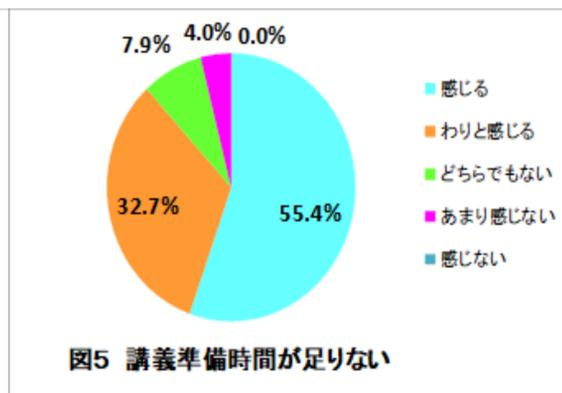
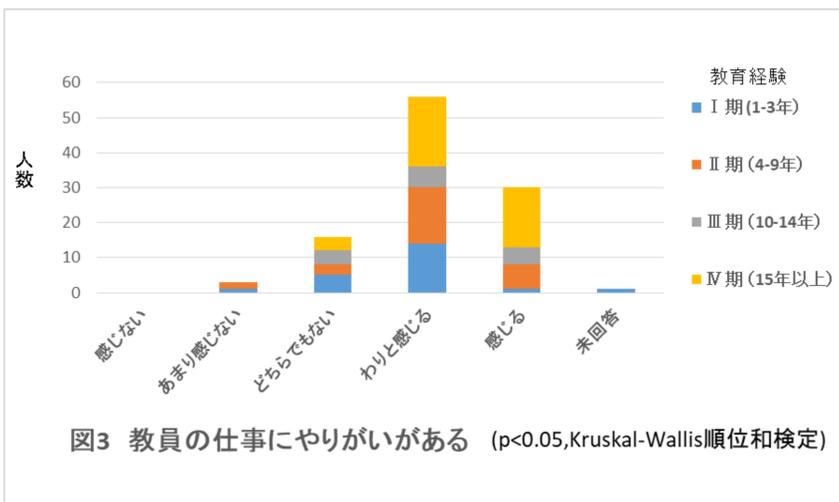


### 2. 勤務様態

就業時間の平均は11.5時間（最大17，最小7，SD2.1），その内，時間外業務は平均3.1時間，平均昼食休憩時間は0.5時間であった。出勤時間は7:30～9:15，退勤時間は17:00～22:00であった。校務をしている時間は，図2の通りで，朝6:00から深夜0:30まで，学内のみでなく帰宅してからも仕事を持ち帰っている状況にあった。

### 3. 職務に対する看護教員の意識

「仕事にやりがいがある」と感じる教員の割合は，15年以上の教育経験者が最も多く（37.8%），教育経験年数との間に有意差（ $p < 0.05$ ，Kruskal-Wallisの順位和検定）を認めた（図3）。教員の意識で「感じる」「割と感じる」を合わせて割合が高いのは，「仕事が多すぎる」96.9%（図4），「講義準備時間が足りない」88.1%（図5），「生活にゆとりがない」80.0%（図6）であった。



## 【考察と結論】

今回の調査対象は，年齢が50～54歳をピークとして，30歳から69歳までの正規分布に近く，教員経験年数も平均11.3年と年齢や経験が比較的高い実態を示していた。「仕事にやりがいがある」と感じる教員の割合は，15年以上の教育経験者が最も多く（37.8%），教育経験年数との間に有意差が認められたことから，看護教員がやりがいを持てるかどうかは，キャリア発達をすることと関係していると考えられた。看護教員は平均3時間を超える超過勤務や自宅で早朝や深夜に及ぶ仕事を行っている状況も見られ，実習と講義が並行して進むことや学生指導に要する時間の多さ等から，講義の準備時間が足りない，生活にゆとりがない，仕事が多すぎるなどの実感をもつ教員の割合が非常に高い状況にあった。これらから，教員としてのキャリア発達を推進することおよび厳しい労働環境の改善が早急に求められることが示唆された。